

### 三. 俳句と音楽

山下正純

#### 音楽に国境のなし平和の日

学生時代よりずっと続けている趣味としてオーケストラがある。そういうこともあって最終回である今回は「俳句と音楽」というテーマで締めくくりたいと思う。

まず俳句と音楽で共通の体験をしたことを冒頭に挙げたい。前回、句会という短時間の過程にて初対面の方との距離感が驚くほど縮まるという話をさせていただいたが、音楽の世界にも同じ現象がある。お相手はザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団の首席バイオリニスト、その雲の上のようなお方とモーツァルトの二重奏をコンサートで一緒する機会に恵まれた。その際にも前日初合わせ、本番当日リハの後、すぐ本番というスリリングな演奏会であったが、演奏後はまさに句会同様、旧知の仲となって打ち上げでは肩を組み合う仲になった。「言葉」と「音楽」絆を培う媒体こそ異なるもののそこから生み出される効果は同じである。

#### アンテナを立て交信の葱坊主

続いては、かねてより肝に銘じている俳句と音楽で共に活用できそうなある教訓についてお話したい。以前ある指揮者から「たくさんのアンテナ（ものさし）を持ちなさい」という指導を受けた。先の句のように私たち

は葱坊主ではないけれど、情報化社会の中いつもアンテナを張って有用な情報収集に日夜励んでいる。ここでの「たくさんのアンテナ」とは「複眼視」すなわち「同じ対象物を縦横無尽に多種多様な価値観にて多角的に物事を見る」というニュアンスの教訓である。同じようなことを時限こそ異なれ学生時代に聴講した数学者の森毅さんからも「商売、政治、伝統、文化といったジャンルによって時間軸は異なり、目指すジャンルによって今なすべきことの是非が変わってきます」と教えをいただいた。

たとえば音楽の「コンサート」を対象物とした場合、音程（ピッチ）、和音（ハーモニー）、強弱（ダイナミック）、表情、テンポ感、メロディ、選曲（プログラミング）、聴衆の反応、指揮者、奏者、オーラ、同伴者、演奏曲への思い出、会場、ホールの響き、拍手、演出、聴衆のマナー、アンコール・・・具体的にはこういったアンテナ（ものさし）が挙げられるが、人はこういったものを無意識のうちに受信して、ひとりひとり異なったコンサートへの思いを心に刻むのである。

そして俳句においては、対象物（先の句では「葱坊主」）が同一のものであっても、そこに「もののあはれ」を本質的に備えたひとりの人間が、異なったアンテナないしフィルタによって感受し俳句を発するとき、この世にたったひとつの「滑稽俳句」が誕生するのである。

(完)